

氏名(本籍)	宮本 聡介 (栃木県)		
学位の種類	博士(心理学)		
学位記番号	博甲第1,604号		
学位授与年月日	平成8年11月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	心理学研究科		
学位論文題目	対人印象の形成過程における連続行動情報の処理		
主査	筑波大学教授		堀 洋道
副査	筑波大学教授	教育学博士	海保博之
副査	筑波大学助教授	保健学博士	宗像恒次
副査	筑波大学助教授	文学博士	山本真理子

論文の内容の要旨

本論文は、他者の「連続行動情報」に焦点を当て、対人印象の形成場面で知覚者が連続行動情報をどのように処理しているのかを明らかにしようとした。

これまでの対人認知研究では、行動やパーソナリティ特性などの対人情報から、どのような印象が形成されるか、また対人情報がどのように記憶されているかという点が、主に記述情報を用いて検討されてきた。こうした従来の対人認知研究の視点とは異なり、時系列的に変化する他者の連続行動情報に焦点をあて、知覚者が他者の連続行動から印象形成の手がかりとなる情報をどのように入力しているのかという情報の知覚的過程と、入力された情報から具体的にどのような情報を引き出しているのかという情報の認知的過程から検討し、対人認知場面での連続行動情報の処理過程をモデル化することが本論文の中心的テーマである。

本論文は以下の4部から構成され、10の実証研究が含まれている。

- 第1部 対人認知における連続行動情報の意義と理論的位置づけ
- 第2部 連続行動情報の処理プロセスの明確化(研究1～研究5)
- 第3部 特性スクリプトと特性活性化モデルの提唱(研究6～研究10)
- 第4部 全体的総括

次に各部の概略を述べる

第1部 対人認知研究における連続行動情報の意義と理論的位置づけ

これまでの対人認知研究でどのような対人情報が研究対象とされてきたかを概観し、連続行動情報に焦点を当てた研究が極めて少なかったことを指摘すると同時に、連続行動情報を対人認知研究で扱うことの意義を論じた。特にここでは連続行動情報を対人認知研究で扱うことによって、1.より現実に即した対人認知過程を明らかにできること、2.これまで見過ごされがちであった情報の知覚的過程も視野に入れた検討ができること、3.知覚者自身の主体的な処理過程を強調できること、4.逐次的処理の視点を導入できることの4点を論じた。

第2部 連続行動情報の処理プロセスの明確化

第1部の理論的研究において、これまでの対人認知研究では知覚者は連続行動を「分割」しながら処理してい

ると考えられていたことが報告されたが、第2部ではこの論点に対する問題点を指摘し、対人認知場面では、連続行動から印象形成の手がかりとなる情報を選択的に「抽出」しているのではないかという仮説を提示した。そしてその点を検討するために「行動抽出課題」を用いた幾つかの実証研究を行った（研究1・2）。行動抽出課題とは例えば印象形成場面であれば、印象形成の手がかりとなる行動が出現したら、ボタンを押し、その行動が終わったらボタンを離すよう被験者に教示することで、行動観察中、印象形成の手がかりとなる情報がどれだけ知覚的に処理されたかを測定する課題である。実験の結果、知覚者は極めて出現時間の短い行動を印象形成の手がかりとして主体的に選択し処理していること、また繰り返し行動を観察すると処理される情報の量が増えたり、抽出される1情報単位あたりの時間も長くなることが明らかにされた。

また、こうした知覚的過程では、知覚された行動情報に対し知覚者自身が何らかの認知的処理を行うことで、処理された情報を意味的に解釈し認知的表象に組み込んでいるはずである。このことを明らかにするために行動抽出課題後に報告された内省の内容を検討したり、行動観察中の思考を発話させその発話プロトコルを検討することでどのような認知的処理が行われているかを検討した（研究3・4）。その結果、知覚者は行動の知覚的過程で逐次的に、抽出情報から特性情報を引き出していることが明らかにされた。また抽出対象となりやすい情報が対人判断の材料として利用されていることがあわせて明らかにされた（研究5）。

以上の点から、知覚者は対人認知事態で連続行動情報観察中、逐次的に印象形成の手がかりとなる情報を抽出し、抽出された情報から特性情報を引きだし、対人表象に組み込んでいることが明らかにされ、その結果をもとに連続行動情報について仮設的な処理もでるが提出された。

第3部 特性スクリプトと特性活性化モデルの提唱

連続行動から特定の情報が抽出され、その情報から特性が引き出されている事が第2部から明らかにされ、その基本的な処理モデルが提出されたが、抽出、特性の引き出しに到るプロセスにどのようなメカニズムが介在しているのかを明らかにするために、さらに深く検討することが第3部の目的であった。ここでは「特性活性化モデル」と、そこに介在する「特性スクリプト」概念の妥当性を実証的に検証することを目的とした。

特性の事例となるような行動のスクリプトを「特性スクリプト」とよび、この特性スクリプトと特性概念が知覚者自身の知識表象内で階層的なネットワーク構造をなしていると仮定し、知覚者は特性スクリプトに合致する行動を観察すると、その時点で特性スクリプトが活性化し、その結果上位概念である特性概念が活性化する、というのが「特性活性化モデル」の基本的な考え方である。

行動観察中、逐次的に特性概念が活性化しているのではないかという観点から検証が行われ、抽出対象となりやすい行動を観察すると、その行動から特定の特性概念が活性化されていることが特性判断の反応時間を用いて明らかにされ（研究6）、特性概念を活性化させやすい行動は、記憶にも残りやすい事などが明らかにされた（研究7・8）。さらに特定の特性概念が活性化されていることが行動の知覚的過程に影響を与えることも明らかにされた（研究10）。また「特性スクリプト」に該当する具体的な行動を自由記述法を用いて収集したところ、その中に極めて短い出現時間で生起する可能性のある行動が多く報告され、知覚者が特性スクリプトを既有知識として持っていることが明らかにされた（研究9）。

以上の点から、知覚者が連続行動から印象形成の手がかりとなる行動を観察する際に、特性概念が活性化されている可能性が示され、またこうした処理過程には知覚者の既有知識である「特性スクリプト」が介在した「特性活性化モデル」からの説明が有効であることが示唆された。

第4部 全体的総括

本論文では、本論文で行われた10の研究結果について総括的な考察が行われ、次の2点が本論文の主要な主張点として論じられた。第1に連続行動の知覚的過程では、知覚者は連続行動から印象形成の手がかりとなる情報を主体的に選択し処理していること、第2に認知的過程においては、知覚者は選択された行動から、逐次的に特

性情報を引き出していることである。そして特性情報を引き出すメカニズムとして、知覚者が特性スクリプトを既有知識として持っており、特性スクリプトの活性化が特性概念の活性化に介在しているとする特性活性化モデルの有効性と残された問題などが論じられた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

これまで対人情報として他者の行動情報に焦点をあて研究したものはあるが、多くの場合、行動情報として記述情報が代用されていた。それに対し現実の他者の行動を取り上げ、対人認知場面で人が他者の行動をどのように処理しているのかという問いに対し、独自の鋭い視点から論点を整理し、「抽出法」という新たな方法論を提唱し、最終的に極めて独創性の高い処理モデルを提出したことが本論文の評価すべき点である。

この論文の主要な主張点である特性活性化モデルについては、いわゆる社会的認知の視点から、連続行動の処理を説明しようと試みたものであり、こうした視点に焦点を当て、実証的な研究を行ったのは本論文が初めてであるといえる。本論文において特性活性化モデルの妥当性が十分に検証されたとは言いがたいが、本論文の特性活性化モデルが対人認知の基礎にかかわる重要な知覚・認知過程を記述しようと試みていることは、今後の多くの同様の問題を扱う研究の基礎的な知見となりうる。この論文が対人認知研究の分野に新たな知見をもたらした意義は大きいと考えられる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。